

MfG_J_safron_master carpenters and burinists

サフラン酒大工棟梁、大看板、ほかサフラン酒の指物師

master carpenters and burinists

= wood carving craftsman

1. 大工集団

- (1) サフラン酒本舗の大工の概要 ～ 詳細は不明
- (2) 各地の大工集団
- (3) 名棟梁 四代 篠田宗吉

2. サフラン酒大看板の金子九郎次

- (1) サフラン酒大看板
- (2) 函館の高龍寺建立 の越後集団

3. サフラン酒 紫檀の座卓の小川悠山

4. 小川悠山・詳細

- (1) 長岡あーかいぶno3
- (2) 「越佐工芸家名鑑」S59 新潟県美術商組合刊
- (3) 内山弘 唐木細工の名工 小川悠山、長岡郷土史(2015)

5. その他

- (1) 一階玄関に面した、黒柿の欄間

1. 大工集団

(1) サフラン酒本舗の大工の概要 ～ 詳細は不明

まとまった情報は少ないが、金子九郎次の調査で入手できた情報として、明治初期の、北海道・函館における越後大工の活動の一例を、別表1 に示す。出身地には、柏崎、柿崎、出雲崎、間瀬など、日本海沿岸の町が見られる。函館の高龍寺建造に従事した宮大工、彫刻師のなかに、機那サフラン酒の大看板の作者、金子九郎次の名がある。金子九郎次については、2章にまとめた。

平澤喜一郎 サフラン酒 の離れを作ったという。

平澤喜一郎は、摂田屋出身の画家・平澤熊一の父親、そして兄も大工で、ともにサフラン酒 の離れの建築に従事しという。

棟梁の名の詳細は不明(*1) だが、数回の増改築があり、複数名と思われる。

https://www.neribun.or.jp/event/detail_m.cgi?id=m10226

平澤熊一の年表に、「建設業を営む父・喜一郎と母・ツモの次男として生まれる。」という記載がある。

(*1) 長岡造形大学、平山育夫先生の調査

長岡市摂田屋機那サフラン酒造本舗吉澤家住宅

明治44(1911)年大看板棟札の復原と考察：

長岡市摂田屋機那サフラン酒造本舗吉澤家住宅の研究(20)

長岡市歴史的建造物の調査（計画系）

大看板の明治44(1911)年作成の棟札について検討を行ったが、明らかとなるのは以下の諸点である。

- 1) 明治44(1911)年の大看板棟札で未読であった“棟梁 金安栄口”は棟梁 金安栄吉で、金安栄吉は大正2(1913)年の主屋増築工事において、明治45(1912)年に第1回目の見積を行った。
- 2) 明治44(1911)年の大看板棟札で記される大工田中仁吉は、大正2(1913)年の主屋増築工事においては雑仕事を行った。
- 3) 明治44(1911)年の大看板棟札に彫刻者金子九郎次と記される金子九郎次は、函館高竜寺本堂、金峯神社殿等の彫刻にも関わった。
- 4) 明治44(1911)年の大看板棟札を記した堀井勇次郎は大正2(1913)年の主屋増築工事をまとめた、大正3(1914)年『一覧表』の作成にも関わったものと考えられる。

参考 明治初期の、北海道・函館における越後大工の活動の一例
出身地はも柏崎、柿崎、出雲崎、間瀬など

別表1 越後ら、北海道における越後大工の活動、より
日本建築学会計画系論文集(1997)

表1 村田専三郎『函館建築工匠小伝』（昭和18年編集）中の新潟県出身者
（ただし、相川屋（左官職）、岩谷忠太郎（同）、小山滝江（塗師）を除く）

出身地域	氏 名（生年～没年）	出生(出身)地	主 な 仕 事 な ど
北蒲原郡	田代新蔵(1838～1917)	水原	湯殿山ノ伽藍(M26)。「架橋工事ニ秀ズ」
	藤間宇一郎(安政年間～1921)	北蒲原郡古間新田?	遠藤吉平宅、西別院(M43)、八幡宮(T4)など
	川崎熊太郎(1875～1933)	北蒲原郡柏崎浜?	湯ノ川兼楽園、巴川若松町郵便局など
中蒲原郡	村木甚三郎(1848～1924) *	亀田町	高龍寺、釧路集治監、函館公会堂
新潟	池田栄七(1812or18～1878) *	新潟市九番町	箱館築島、五稜郭、札幌本道など
	池田直二(1844～1904) *	新潟市島町	七重管業試験場、渡辺(金森)店舗、平野店舗、函館病院
	池田登良二(1854～1940) *	新潟	今市商店(M31)、函館毎日新聞
西蒲原郡	伊藤栄吉(1845～?)	内野町[現新潟市]	協同館、料亭、旅館など
	大越与次郎(1890～1940)	赤塚[現新潟市]	大村合名会社に入出。神山大円寺、松風町法華寺など
	酒井啓次郎(1832～1918) *	五ヶ浜[本文参照]	「開拓使札幌ニ…明治五年入りテ」
	平原喜八(1868～?)	角田村[現巻町または中之口町]	瀬崎組に入り、旧裁判所など
	田中紋蔵(造)(1835～1889or98) *	峯岡村[現巻町]	福山専念寺山門、渡辺(金森)店舗、願乗寺、高龍寺など
	田中善蔵(1832～1891) *	間瀬村[現岩室村]	函館裁判所(M8)、招魂社、八幡宮など
	篠原嘉左衛門(c.1832～c.1892) *	間瀬村[同上]	高龍寺。明治25年「夕張ニ於テ…自決」
	田中源太郎(1849～1912) *	間瀬村[同上]	福山法華寺、湯川吉田邸、釧路前田製紙会社など
	古柏石松(1854～1925)	寺泊	造船所経営。村上宅など
二島郡	本間巳之助(1867～?)	寺泊	松代小学校など
	石井松太郎(1868～1925)	寺泊町字野積	弁天倉庫。明治44年「退函樺太ニ移リ…」
	池山甚太郎(1849～1904) *	脇野町字吉崎	高龍寺彫刻
	原篤三郎(1836～1902) *	出雲崎町石井町	高龍寺(嘉永2-)、同再建、称名寺山門扉木彫
	唐沢範二郎(1846～?) *	出雲崎	福山法華寺本堂、高龍寺本堂
	明石茂太郎(1849～1921) *	出雲崎字尼瀬	佐野定七邸、招魂社
	伊藤亀太郎(1863～1944) *	出雲崎町字尼瀬	江差裁判所など。札幌で伊藤組創設
	金子九郎次(1876～?) *	長岡市袋町	高龍寺山門彫刻
長岡	金子九郎次(1876～?) *	長岡市袋町	高龍寺山門彫刻
柏崎	沢田吉平(1862～1922) *	柏崎	高龍寺、実行寺
中頸城郡	篠田宗吉(1827～1903) *	柿崎	高龍寺本堂
佐渡郡	中田国蔵(1852～1912)	佐渡	時任県令社宅
不明	布施留吉(嘉永末年～1923) *	越後ノ国	高龍寺
	紫竹勘次郎(c.1856～1897)	越後	「船大工棟梁ニシテ又建築ノコトモ扱フ」

〔注記〕出身地域は、主として『工匠小伝』の調査執筆時期である昭和前期頃の郡名で示すが、市名で表記されている新潟、長岡、柏崎はそのままとした。出生(出身)地は原表記に現在の町村名を併記した。氏名の*印は本文中で言及した者。

“柏崎の偉人と文化財”のウェブページに記載があったが、柏崎で木材を刻みそれを北前船で運んだと云う。現代工法のプレカットに相当する。大勢が必要な大工仕事は冬場の故郷で行ない、旅先での工事期間を短縮する、一石二鳥の策。北前船の春先の積み荷の少ない時期を輸送手段に活用するという、熟慮の結果のアイデアだったと推察する。(春日の個人的感想)

(2) 各地の大工集団

1) 出雲崎の宮大工集団

<https://n-story.jp/topic/94/page2.php>

file-94 出雲崎の宮大工集団と新潟の社寺建築(後編)

江戸時代、幕府直轄の天領として栄えた出雲崎。そこに、神社や寺の建築に腕を振るった宮大工集団が存在した。

江戸時代の初めに頭角を現し、出雲崎からやがて県内各地に活躍の場を広げた。出雲崎大工の黒甚七が種月寺を、黒甚内が南魚沼市の雲洞庵、柿崎町の楞嚴寺(りょうごんじ)を作ったことが、残っている棟札で明らかになっている。

「それ以外にも、黒奎衛門(もくえもん)が寛文10年(1670)頃に村松藩(現・五泉市)で町づくりに関わった記録があり、時期的に重なる慈光寺建立にも関わったのではないかと推察できます」と、山崎さんは言う。

「加茂市の加茂川上流の方にある日吉神社も出雲崎大工。こけらぶきの屋根の形はセンスがいい。社寺以外にも、長岡や与板、津南、中里、十日町、川西など中越地方に、出雲崎の大工集団の痕跡が残っているそう。

なぜ出雲崎の地に宮大工集団が生まれたのか。

「最大の要因は佐渡の金銀山でしょうね。江戸時代の金銀山開発で、職人や労働者が佐渡にたくさん集まってきた。その中には大工たちがいたはず。金銀の荷揚げ港としてにぎわった出雲崎も、建築の仕事が多かったでしょうから」。

元和2年(1616)に代官所が置かれ、天領となった出雲崎は、佐渡の金銀の唯一の荷揚げ港であると同時に、北前船の寄港地、北国街道の宿場町、漁業の拠点としての側面も持ち、江戸時代に大いに繁栄した。建築のニーズが高まり、職人が流入し、必然的に大工集団が誕生したと推察される。もう一点は、天領だったこと。藩領に比べて移動の規制が少なかったことがあげられる。魚沼を中心に、県内の各地で活躍したことが調査で明らかになっている。

2) 間瀬大工集団

江戸時代、会津の大工は殆どが間瀬大工で、出稼ぎも多かったよう、燕の香林堂近くの吉田諏訪神社

間瀬大工による数多くの彫刻が見られる、総ケヤキ造りの大きな神社。

鳥かごの中のとりを一木から彫り込んだ超絶技巧も見ることができる。

弥彦村矢作の法圓寺の鐘楼と山門

棟梁篠原嘉左衛門の手で普請造営されたものであることが判明している。

間瀬大工とは、越後間瀬村(現在の新潟市西蒲区間瀬地区)に集住したという大工集団で、18世紀から20世紀半ばまで新潟県とその周辺、北海道などで広域的な建築活動を行っていた。

(3) 名棟梁 四代 篠田宗吉 (1827-1903) 上越市柿崎出身
[https://jmaps.ne.jp/kashiwazaki/sakka_det.html?](https://jmaps.ne.jp/kashiwazaki/sakka_det.html?list_count=10&person_id=127)

[list_count=10&person_id=127](https://jmaps.ne.jp/kashiwazaki/sakka_det.html?list_count=10&person_id=127) 柏崎の偉人と文化財

名棟梁と誉れの高い4代目目宗吉善則は、柿崎町相沢彦作の三男。新町(西本町3)篠田家に婿入、修業熱心で腕前も上達、余芸に俳句をたしなみ大字と号した。建立した社寺は、柏崎では番神堂・妙行寺・閻魔堂・光円寺・八坂神社・宮川神社などがあり、刈羽村の東福院、京都の東本願寺のほか、高田、出雲崎、北海道にもある。晩年は函館高竜寺本堂を建立した。

その時の副棟梁は沢田吉平、彫刻は原篤三郎、金子九郎次、石工は小林群鳳ほか多数の職人が活躍。名棟梁宗吉を讃える一節が柏崎の民謡三階節にあり(*1)、その顕彰碑(*2)は八坂神社に建つ。

(*1) 三階節に「下宿番神堂がよく出来た。向拝の仕掛けは新町宗吉大手柄」

<http://www.kisnet.or.jp/nippo/nippo-1998-06-24-2.html>

名匠・篠田宗吉の民家補修

番神堂、えんま堂などを手がけた柏崎の名棟梁、4代篠田宗吉が造ったと伝えられる市内女谷、農業・武田昭さん(71)方のかやぶき民家で大掛かりな補修工事が行われている。築後200年近くを経て傷んだ柱などを手直しするため、土台上げの工事が本格化している。篠田宗吉は京都本願寺再建の際、副棟梁に選ばれた名工匠。三階節に「下宿番神堂がよく出来た。向拝の仕掛けは新町宗吉大手柄」とうたわれる。

武田さんの居宅約230平方(メートル)は、江戸時代末、若き宗吉が作った木造かやぶき家屋とされ、「鶴川の話」(昭和61年刊行、高橋義宗さん著)でも紹介されている。けやきの柱や梁は、屋敷の近くにあった大けやきから取ったもので、幹は定屋(じょうや)柱に、枝は梁材に使われた。釘を使わず木を組むという昔ながらの匠の技が生きている。(柏崎日報 1998/ 6/24)

(*2) 篠田宗吉の碑

八坂神社の境内、プレハブ社務所の裏手

【碑銘】梓人篠田君碑【建立年】明治37年(1904)7月

【主文題・撰】県社居多神社社司 渡辺巖【主文書】巻菱沢

【碑文刻】小林群鳳

・番神堂 柏崎市指定文化財:有形文化財・建造物

明治4年の大火で類焼、同11年に再建され、本殿と拝殿の間に石の間を設けた権現造りで、本殿の壁面には、彫刻が施されています。

棟梁は、四代目・篠田宗吉、石工・小林群鳳(ぐんぼう)、

彫刻は出雲崎の原篤三郎・脇野町の池山甚太郎・直江津の彫富(ちょうとみ)、飾り金具は大久保の歌代佐次兵衛が鋳造したものです。

四代目・篠田宗吉は、東本願寺(京都市)でも、副棟梁を務めた。

2. サフラン酒大看板の金子九郎次

(1) サフラン酒大看板

前回の公開はH24年6月、大看板をアオーレに展示。以後は、倉庫に横たわっている。その撤去・サフラン酒への輸送に200万円かかったという。ヒノキ製、本体部分は精巧な彫刻が施され、長さ640cm、幅194cm。



その上に幅、奥行きともに212cmの屋根。
 作者は、北海道・函館の高龍寺の建造などにあたった柏崎の宮大工集団の彫刻家、金子九郎次とされる。
 正に精緻な彫りである。
 柏崎の宮大工集団は、北前船の運行で、全国から仕事を請けた。

(2) 函館の高龍寺建立 の越後集団

高龍寺は1633年に松前の曹洞宗法源寺の末寺として盤室芳龍氏の創建に始まる、函館で最も古い寺院。函館大火により建物は一度焼失し、明治12年に現在の場所に移転し、1900年に本堂が完成。

10個の建造物が国の登録有形文化財に指定され、特に山門は有名。棟梁以下すべて越後衆、越後の彫師、原篤三郎氏と金子九郎次氏が作ったと言われる彫刻が細部にまでこだわったもの。

彫物製作年代: 本堂・明治33年(1900)、山門・明治43年(1910)

また、蠣崎波響氏の最高傑作と言われる「釈迦涅槃図」も所蔵。

大看板の試訳

Main part of the Ohkanban, large company panel, is 640 cm height and 194cm width wood, decorated with the sophisticated wood-carving.

You can find a dragon in it, very vivid dragon.

It was made in 1911, the carpenter was Kaneko Kurouji, one of the skillful carpenters among the Kashiwazaki carpenters group.

These days, the Kashiwazaki carpenters group had been dispatched to large temple construction operations all over the country.

The last release of the Ohkanban was held eight years ago 2012, on the Aore city office "The Opening year"..

3. サフラン酒 紫檀の座卓の小川悠山

写真に、かつての座敷の座卓があり、小川悠山の作とされる。
小川悠山は長岡の指物師

卓台の世界にも名人と呼ばれる作者がいて、古くは小川悠山、
日比野一貫斎、葛木香山、白井潤山、金子一彦などが
最右翼の名人とされている。
このうち、白井潤山は、小川悠山、及び養父五郎作の弟子とされる。

長岡ビジネスアーカイブNo3_小川悠山の紫檀の盆(平成26年7月)
明治39年「長岡商品陳列所」

詳細は、別シート。

4. 小川悠山・詳細

(1) 長岡あーかいぶno3

北越戊辰戦争から30年後に刊行された『日本全国商工人名録』のページをめくると、長岡ではすでに200名ほどの商工業者が活躍していることがわかります。呉服商が最も多く、ついで穀物商、海産物商、醤油・清酒業と続きます。

大正6年、長岡市と商工業界あわせて大々的に「長岡開府三百年祭」が開催されます。これを受けて、長岡が益々発展していくようにと、翌7年リニューアルオープンしました。

「陳列所」とはどのようなものでしょうか？今ここに、広げると縦46cm×横58cmの大きさになる、1枚のリーフレットがあります(大正15年『長岡商業会議所附属 長岡商品陳列所要覧』写真参照)。限られた紙面のなかに、「陳列所」の沿革、館内略図、業務の概況、出品者名など、多くの情報が盛り込まれています。

「陳列所」でのセールや、品評会、展覧会をとおして長岡の職人は腕を磨き、販路を伸ばして行っただけです。当時の長岡では、職人がオリジナルな物をつくって売るのは当たり前のことでした。長岡で仕立てた着物を着て、長岡でつくった生活用品に囲まれて暮らしていました。

「陳列所」出品者の1人、小川悠山の紫檀のお盆を拝する機会がありましたが、とても丁寧な彫りで、根気を要する芸術作品でした。

(2) 「越佐工芸家名鑑」S59 新潟県美術商組合刊

小川悠山(1871-1942)

長岡藩出入りの棟梁・佐藤屯の三男として生まれる。幼少にて同じく大工町大工棟梁の小川五郎作の養子となる。

明治維新のあと、家具工芸に転じ、大阪の名工、竹村師に師事、京都や奈良に遊学し古典工芸を研究、唐木を中心に名品をのこした。子弟多く、小出の阿部祥山、新潟の小笠原泰山など。S8年、高島屋に招かれ、一家で上京。三越にも納品。妙宗寺にお墓

卓台の世界にも名人と呼ばれる作者がいます。

<http://bonsaiya.world.coocan.jp/bonsai-turedurekusa-5/147.htm>

古くは小川悠山、日比野一貫斎、葛木香山、白井潤山、金子一彦などが最右翼の名人。

阿部祥山は、盆栽名卓の作家として、名人小川悠山と並ぶ大家。

祥山は重厚な悠山に対して繊細な彫技が魅力の装飾性ある女性的な作品が多く残されています。

詳細は以下

(3) 内山弘 唐木細工の名工 小川悠山、長岡郷土史、第52号(2015) p127-

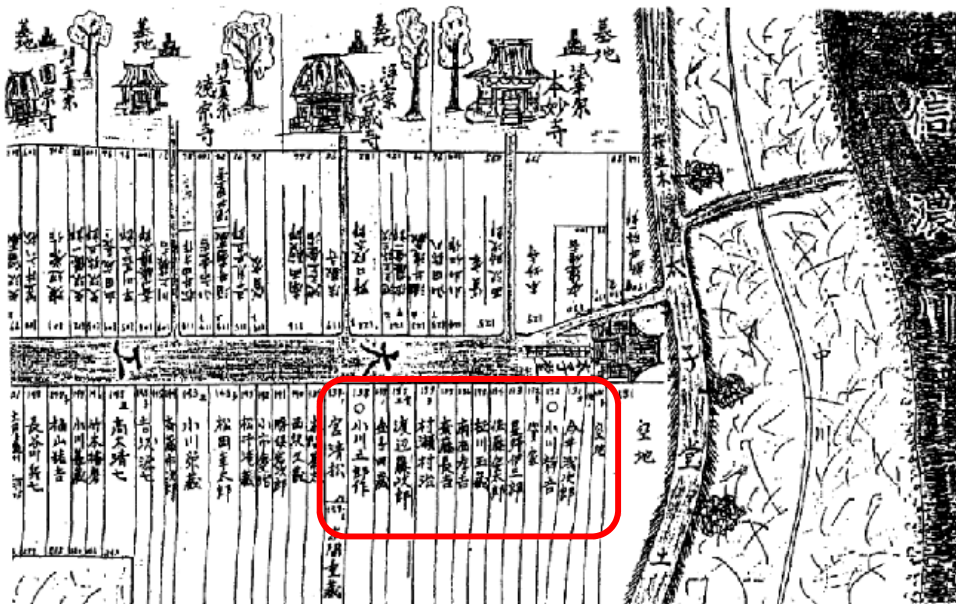
悠山は長岡の唐木細工の衰退を挽回したいと考え、明治二十七年（一人九四）十一月、東京美術学校教授竹内久一につき彫刻を一年半ほど研究した。その間、福地天香、前田芳雪の門を叩き意匠図案と実用器具製作への応用を学んだ。その後京都や奈良の神社仏閣を訪ねて古美術工芸品を研究して帰郷、明治三十年から製作に専心した。

養父木山と悠山は徒弟の養成にも力を入れ、阿達祥山、倉重楽山、白井潤山、小笠原泰山、田村泰山などの子弟がある。中でも祥山は悠山について著名であり、悠山上京後の長岡唐木業界をリードした。

悠山は大正十五年（一九二六）には長岡唐木工芸組合を設立し、十名の会員と共に研鎮を積んだ。

図2に大工町（現日赤町）の住居図を示す。養父五郎作の近くに一家を構えていたことが判る。

昭和四年（一九二九）、東京高島屋の招きで一家をあけて東京に移住した。住所は東京市日本橋区江戸橋二丁目四番地、通称東仲通り川瀬石町である。ここに店を出し、長岡特産唐木細工、高等指物販売所として、作品の販売をした。高島屋のみならず三越家具部、黒江家具店などの一流家具取扱い店に作品を納入した。



5. その他

- (1) 一階玄関に面した、黒柿の欄間
 大きな黒柿の透かし彫り欄間 （作者不明）
 黒い縞状の杳目を黒柿目と云う



材料の調達、選定
 杳目の黒の位置を生かした
 デザイン力
 堅い一枚板を彫る、
 透かし彫りの技術

三拍子揃った名品